

インプットアウトプット理論に基づく視聴説授業の 教え方の模索

張 蠡*

How to Teach Audio-Visual Speaking Lesson based on Input and Output Hypothesis

Li Zhang*

Received December 9, 2013

Abstract

In view of the existing situation that some universities in China have cancelled the audio-visual speaking class in learning foreign language, this paper according to the input and output of second language acquisition theory, aims to clarify that audio-visual speaking class is a very important course for students to learn foreign language.

Experiments from teaching showed that audio-visual speaking class can help students a lot to improve their listening skill and speaking in learning foreign language, if teachers can motivate students by changing their traditional teaching method, selecting the contents that conform to the trend of times, natural language, cultural connotation and students are interested in.

Key words

the Input Hypothesis; Output Hypothesis ; comprehensible output ;classroom activities

1 はじめに

「聞く」「話す」は外国語を勉強する人にとって大変重要な技能である。この二つの技能を身につけないと外国人とのコミュニケーションがスムーズにいかないとされている。したがって中国の外国語教育の一環として基礎段階からその育成が重視されている。特に外国語を専攻する大学生に「聞く」「話す」をめぐる訓練を四年間通して徹底させようという姿勢は大学のカリキュラムを見ればわかる。学生のそういう能力を伸ばすために視聴説という授業が大学四年間を通して開設されている。一、二年生の視聴説授業はヒアリングの練習だけで精いっぱい、映像を見せるのはたまにしかない。本当の意味の視聴説授業は三、四年生になってからである。しかし、教材もないし、授業も週に一回しかないので、授業の内容は先生の手元にある

*国際交流センター（西安外国語大学交流教員） International Exchange Center

日本のテレビドラマや映画やアニメーションを見せるだけで終わるといふことになりがちである。視聴説という、学生たちが持っているイメージは日本テレビドラマ、アニメーションを楽しめる娯楽の時間だという考えが調査からわかった。「視聴説授業で見るテレビドラマなどは自分でインターネットでも見られるので、授業に出る意味はない。視聴説授業をやめてほしい。」という学生からの声もあって、本当に視聴説授業をカリキュラムから削除する動きが出てきた。視聴説授業のメリットは何か、限られた時間で学生に満足させるような視聴説授業はどのようにしたらいいのか、本論文は第2言語習得のインプットとアウトプット理論に基づいて視聴説授業の教え方を模索してみる。加えて、模索した方法の有効性を実験で証明するように試みた。

2 視聴説授業とインプット理論

アメリカの言語学者クラッシュェン(Krashen)は1980年代、第二言語習得理論の5つの仮説、すなわち①習得・学習仮説(the Acquisition-Learning hypothesis)、②自然順序仮説(the Natural Order hypothesis)③モニター仮説(the monitor hypothesis)④インプット仮説(the Input hypothesis)⑤情意フィルター仮説(the Affective Filter hypothesis)を打ち出した。このうち最も重要なのがインプット仮説である。言語特に外国語学習の肝心な問題に答えたからである。この仮説は外国語学習及び外国語教育に真新しい概念を示してくれた。外国語教育界に大きな影響を及ぼした。

クラッシュェンは「聞く」「読む」という行為は言語学習の過程で最も大切で、大量の理解可能なインプットさえ与えれば、習得に繋がると言っている。理解可能なインプットとは現在の自分の中間言語のレベル(i)より、少し進んだ要素を含む言語(i+1)に接すると、学習者は周囲の状況や文脈などによりその意味を理解する。その結果、iの打開から次のi+1に進むことができる。つまり、現在の自分の言語能力よりもほんの少し高いレベルのインプットを理解することによって「習得」が生じる。(ロッドエリス 1988)換言すれば、自分の今のレベルより少し上の新しい項目を含む日本語を十分聞いたり読んだりして、その内容を理解すれば日本語の力が伸びると考えられる。

外国語学習者の習得に役立つインプットとはどんなものなのかを次の4点にまとめた。

- ①理想的なインプットは理解可能で学生の興味をそそるようなものでなければならない。視聴説授業では、映像資料を見せるから、学生は音声と映像の二ルートに頼ってインプットの内容を理解することができる。これは音声だけのヒアリングより内容が把握されやすくなり、学生の興味を引き出しやすいし、学生自身も学習に身が入りやすいのである。それに、視聴説授業で使われる映画、テレビドラマなどは必要に応じて、字幕を見せたりすることができる。これは聞き取れなかったり、聞き逃したりする内容をその場ですぐ学生に確認させることができるという視聴説授業ならではのメリットがある。言語の習得において、子供が母国語を習得するときのように、理解できる表現を繰り返しながら覚えるのが最も効果的な「習得」であると言われているように、視聴説授業の内容は同じ言葉、表現が違う人によって何度も繰り返されることがよくある。まさに理想的なインプット方式そのものなのではないかと思う。
- ②理想的なインプットは目的言語の国の文化情報も入らなければならない。言葉と文化の密接な関係は論じるまでもない。外国語教育において文化を導入する重要性も繰り返して強調される。したがって、学習者の言語能力を伸ばすようなインプット内容はもちろんのこと、文化に関する情報も入ることによって、学習者の文化意識を養成するのも大切なのではないかと思う。中国での日本語学習者は日本語言語環境に触れるチャンスが少ない傾向にある。日本語でコミュニケーションする適切性の把握に欠けている。フォーマルな場でインフォーマ

ル向けのぞんざいな言葉や表現を使ったり、逆に日常的な会話であらたまった言葉や表現を使用したりすることがしばしば見られる。したがって、学習者に言語と文化を同時にインプットする必要がある。これも視聴説授業においてほかにできる授業はないだろうと思う。

- ③理想的なインプットは自然な目的言語でなければならない。外国語大学の学生にとって、外国語としての日本語は幼児言語習得のように自然に無意識に学ばれるのではなく、教室での文法学習など意識的に学ぶしかないのである。理想的なインプットは文法秩序に従わないほうがよいというクラッシュの理論がある。したがって、標準的、規範に合っているような日本語教材は日本語学習にいいものとは言えない。そして、内容が古臭く、文学的な教材もいいとも言えない。その理由は、ほとんどの日本語学習者の勉強目的は「研究」のためではなく、応用することにあるからである。それに、教材に出ている会話は不自然で、日常生活でそのまましないものがある。たとえば、橋本眞吾氏（2006）が教科書に出ている不自然な例として『新日本語の中級』スリーエーネットワーク、「解答・スクリプト」から以下の会話をあげている。

A：佐藤さん一緒に会社の近くのスポーツクラブに入りませんか。スポーツは健康にいいですし。

B：でもねえ、ぼくは通勤時間が長いからね

A：毎日する必要はないですよ、週に二日ぐらいどうですか。

以上の会話は実際の日本語話者の会話と比較すると不自然な点が見られると指摘している。¹⁾そして、日本人による修正例を一つ提示した。²⁾

A：佐藤さん、いきなりですが、一緒に会社の近くにあるスポーツクラブに行ってみませんか？たまには体を動かすのも良いですよ。

B：でもなあ、僕、通勤に結構時間かかるからなあ。

A：毎日じゃなくてもいいですよ。僕も週2日くらいで行ってますから。

このように教科書に出ている人工的に作られた会話より視聴説授業で使われるドキュメンタリー、映画などは日本人が実生活の中で日本語の使用状態を示し、生き生きとした生な言語と言えるのであろう。

- ④理想的なインプットは時代についていけるような最新のものでなければならない。インプットした言語内容は学習者が最新の情報であることに気付いたら、それに関心を抱くに違いない。しかも、学習者の興味に合うような内容だったら、積極的に自分のものになるように努力するものと考えられる。視聴説授業では幅広い範囲にわたる時事ニュースを見せることが可能である。例えば、「3.11 東日本大震災」の時、ネットでダウンロードした映像資料とインタビュー番組など見せたら、こういう最新情報を求めている学生のニーズに応えられて、勉強効果が上がったという筆者自身の経験がある。

3 視聴説授業とアウトプット理論

アウトプット仮説 (Output Hypothesis) は、Swain によって主張されている。理解可能なインプットに合わせて、理解可能なアウトプット (Comprehensible Output) が言語習得にとって必要である。理解可能なアウトプットとは、より正確 (precise) で、一貫性 (coherent) があり、適切な (appropriate) 表出のことである。また、アウトプットの機能として、四つ指摘されている。(大関浩美 2010)

(a) 気づきを促進する。アウトプットをすることで学習者は現在の能力で「自分の言いたいこと」と「言えること」とのギャップに気づくことができる。そのあとのインプットに注目する可能性がある。

(b) 言語形式への注意。インプットするときには必ずしも言語形式に向かない注意を言語形式に向けさせることができる。³⁾つまり、言語形式へ注意を向けながらアウトプットを修正していく過程が言語習得を促進する。

(c) 仮説を立て、検証する。表出することによって目標言語と自身の中間言語のギャップに気付く。自分の中間言語が相手に通じるか、適切なものであるかを、相手の反応を見て判断する。

(d) 自動化。練習により流暢さを促進する。口に出して練習することにより、すでに知識は持っているが、流暢に使えないものが流暢に使えるようになる。心理言語学の観点からは、既に獲得している知識へのアクセスを自動化するという意味で言語習得に寄与すると考えられている。

以上述べてきたように、視聴説授業では見せたり聞かせたりすることによって、言語習得に理想的なインプットができる。それに、話させる練習を工夫すれば、言語習得上必要不可欠なアウトプットの役割も果たせる。しかし、教育実践で、どのようにしたら、視聴説授業のメリットを最大限に発揮できるのか、これは授業設計によるところが大きいのではないかと思う。

4 視聴説授業の実践

4.1 教材の準備

映像資料の選択は視聴説授業の目的を考慮に入れなければならない。中国の日本語専攻高学年段階の教学大綱（2000）を調べたら、高学年「聞く」「話す」能力の目標について、次のように書かれている。

「聞く」について

- ①日本人が標準語で普通のスピードでした演説、談話を聞き取り、早く反応し、正しく理解することができる。その上で中心内容を繰り返すことができる。
- ②テレビ番組、現場のインタビュー、アナウンス、訛りのある日本人の話などを聞いてその要点と主な経緯を押さえることができる。

「話す」について

- ①日本語で正確に自己の考え、感情を表現ことができ、日本人と自由にコミュニケーションすることができる。
- ②短時間の準備で日本語で即席発言、学術見解の発表、よく知っている内容について議論、我が国の政治方針や国内外の問題について意見論述することができる。以上のことをする時使う日本語は発音、アクセントが正しい、話の筋がよく通って、表現が流暢、誤解を招くような文法的な間違いはないようにできる。
- ③状況、相手によって正しく適切な表現が選べること。特に言葉のプラス、マイナスのイメージ、敬語、語気は間違えないようにできること。

以上の内容を読めばわかるように、日本語専攻の高学年の学生に求める「聞く」「話す」能力はかなり高いと言える。大綱目標の実現に近づくようにするにはまず広い範囲で、内容豊かな視聴教材を準備しなければならない。しかも、言語形式のインプットだけでなく、文化内容のインプットも取り入れるように心がける必要がある。私が授業で準備した教材は日本のアニメ、テレビドラマ、映画、ニュース、ドキュメンタリー、ワイドショーなど広範囲にわたるものからなっている。それに、中日間及び世界で注目を浴びるような大事件が起きた場合、インターネットかテレビ放送から映像資料を取っておいて授業で使うこともある。

4.2 授業設備の利用

視聴説授業はマルチメディア教室でやることになっている。マルチメディア教室には学生用コンピュータ 40 台と教師用操作台がある。教師の操作によって、テープ、DVDの再生、プレゼンター、グループコミュニケーション、弁論会、クイズなど種々優れた機能がっている。

4.3 授業中の活動

視聴説授業は二つの原則に基づいて設計する。一つは学生の日本語総合技能、特に「聞く」と「話す」能力の向上を目指す。もう一つは、マルチメディア教室の設備と機能を十分に生かして、学生と教師の間でリラックスの雰囲気でのコミュニケーションできる場を作るように工夫する。学生は授業で受身的に見させられたり、聞かされたりする存在より、授業の積極的な参加者、交流者であり、教師もテープなど再生したり、解釈したりする役目というより、学生のコミュニケーションを刺激したり、援助したりするような役に変わるように心がける。

4.3.1 ウォーミングアップ

①視聴内容を見せる前に、まず学生の理解を妨げるような言葉、表現をプリントして配って前もって勉強させる。

②視聴内容の理解に役立つ背景資料を準備して配る。たとえば、時事ニュースの場合、同じニュースの新聞資料やインターネットでの報道資料などの書面資料を読ませる。テレビドラマや映画の場合は粗筋と文化に関する知識を提示して、読ませたり、調べさせたりする。

4.3.2 本活動

本活動は「汎聴」と「精聴」の二つからなっている。それぞれのやり方は以下のようである。

「汎聴」

①ビデオの一区切りを見せたら、次は消音して、画面だけ見せる。学生に物語の展開と人物の態度を推測させる。このようなやり方によって、学生の推測判断力と文化意識を培うのである。

②クラス全員を三つのグループに分けて、それぞれドラマあるいはアニメの一部を見せる。見終わったら、グループを組みかえて、共同でその内容を復元させる。この練習をする時、各グループはまとまった文章にするようにさせる。それに、できるだけ事前配ったプリントにある言葉、表現を使うようにさせる。

「精聴」

①生き生きとした表現の入ったシーンを切り取って見せる。学生に注意してほしいところを空白にしておいて、穴埋めのような練習問題を聞きながら完成させる。

②学生が難しいと感じるシーンを質問しながら、何回も繰り返して視聴させる。

③吹き込み練習は学生が大変興味津々に参加する活動の一つである。グループ分けして、

好きなシーンを相談しながら選ばせる。台詞を書きとって、人物の口調をマネして暗誦する。吹き込みするとき、口の形、リズム、スピード、感情の把握などぴったりあわせなければならない。

4.3.3 後作業

5人ごとでクラスを六つのグループに分ける。二つグループごとに同じタスクを完成させる。こういうやり方は学生に違うグループの出来具合を比較させ、同じ問題をより多様で広い角度から見させるメリットがある。与えるタスクとしては主題分析、登場人物分析、物語の続編作成などである。タスクを完成するにはチームワークで文章の形にしなければならない

「書く」と「話す」は関係のなさそうな行為であるが、実はお互いに促進し合う関係にある。特に「書く」ことによる「話す」力の向上が大きいものである。「書く」と「話す」ことの違いとしては、ゆっくり考えることができるという思考過程があることにある。表したい考えは落ち着いてそれに相応しい日本語の表現を探って、綿密に組み立てて、より正確に表出することができる。「書く」練習を通して、「聞く」と「読む」というインプットによって、積み重なった言語素材を強化させたり、記憶させたりして言語知識の内在化を促すだけでなく、表出の正確性、流暢性を促進することもできる。これは「話す」力の実質的な向上の土台づくりにつながるのではないかと思う。

このようなグループ活動の形は多くの学生に授業活動に参加させ、クラス人数が多いため、一人一人が話すチャンスが少ないという矛盾をある程度解決できる。それに、日本語力の差のある学生の組み合わせで、グループ内でそれぞれの日本語力に合うようなアウトプットができる。したがって、学生の恥ずかしい、緊張、不安、自信がないといった情意フィルターを下げ、効果的なアウトプットに繋がるのである。⁴⁾

5 授業実験

筆者は2011年9月から2012年2月にかけて一学期間にわたって、西安にある日本語学校中級レベルの二つのクラス、計60人を対象に実験してみた。一クラスは映像資料を見せて、学生に聴いた内容を繰り返させたり、感想を述べさせたりした上で、教師が訂正してあげたり、解釈したりするという伝統的なやり方で授業を進める。もう一クラスは以上述べたようなやり方で授業を進める。映像教材は「となりのトトロ」というアニメと時事ニュースである。実験前後に同時に同じ能力試験N1の聴解模擬問題をやらせて、それぞれの平均成績を出した。それに、スピーチコンテストも行って、同じ審査員のつけた点数による平均成績を算出した。成績は次の表のとおりである。

表1 実験前のヒアリングの成績

クラス	問題理解 (5点)	重点理解 (6点)	概要理解 (5点)	即時応答 (14点)	総合理解 (4点)
実験組	2.3	2.1	2.4	6.6	2.1
対照組	2.2	2.2	2.3	6.8	1.8

表2 実験後のヒアリングの成績

クラス	問題理解 (5点)	重点理解 (6点)	概要理解 (5点)	即時応答 (14点)	総合理解 (4点)
実験組	3.8	3.5	3.4	8.5	3.1
対照組	3.7	2.4	2.5	7.1	2.1

表3 実験前のスピーチの成績

クラス	アクセント イントネーション (10点)	流暢さ (10点)	表現力 (10点)	語彙 文法 (10点)	談話能力 (10点)
実験組	5.5	5.3	5.3	6.4	5.8
対照組	5.6	5.1	5.3	6.1	5.5

表4 実験後のスピーチの成績

クラス	アクセント イントネーション (10点)	流暢さ (10点)	表現力 (10点)	語彙 文法 (10点)	談話能力 (10点)
実験組	7.3	7.4	7.2	6.8	6.6
対照組	5.9	6.2	5.5	6.3	5.7

表1と表2の実験前後の能力試験ヒアリング成績を見れば、実験前はあまり変わらなかったが、実験後は両方とも成績が上がったが、特に重点理解、概要理解、即時応答、総合理解における点数は実験組のほうが一段と上であることがわかった。平均成績は対照組よりそれぞれ1.1、0.9、1.4、1と高いのである。でも、問題理解では、あまり差がないのである。このような視聴説の授業のやり方は能力試験の重点理解、概要理解、即時応答、総合理解に役立つのではないかと思う。

表3と表4の実験前後のスピーチの成績を見れば、どの項目においても、実験組のほうが早い進歩を見せることがわかった。特に、アクセント、イントネーション、流暢さと表現力の実験前後の差はそれぞれ1.8、2.1、1.9と著しい上達が現れた。これは吹き込み練習によるところが大きいと考えられる。談話能力も実験組の進歩が大きいと見られる。これは書く練習によるものと考えられる。

6 終わりに

インプット、アウトプット理論から見れば、視聴説授業は外国語を習得する上で大変役立つ授業であることがわかった。今までの教え方を変えて、インプット、アウトプットの練習を工夫すれば、学習者の「聞く」と「話す」力をアップさせる効果があることが実験の結果から伺えた。これからも視聴説授業ならではのメリットを発揮できるように授業設計の工夫を模索していきたいと考える。

注

- 1) 橋本眞吾「ロールプレイにおける会話の自然さ」岐阜大学留学生センター紀要 2006
- 2) 橋本眞吾「日本人学生は「不自然な会話」をどう修正するか」IAPL Journal Vol.1 2012
- 3) 大関浩美『日本語を教えるための第二言語習得論入門』くろしお出版 2010
- 4) 言語出入力をブロックする心理的な障害を指す。

参考文献

- ロッド・エリス著 牧野高吉訳 (1988) 『第二言語習得の基礎』 N C I
『高等院校日語専業高年級階段教学大綱』(2000) 大連理工大学出版社
大関浩美 (2010) 『日本語を教えるための第二言語習得論入門』くろしお出版